

最近のロシアのマルクス論争によせて(Ⅱ)

小檜山 政 克

目次

問題の所在

I. ガイダール、マウ両氏によるマルクス主義の史的分析

1. マルクスの歴史哲学：発生と発展
2. 現代の経験を通して見たマルクス主義の経済歴史理論
(以上 本誌第54巻第6号)

II. ガイダール、マウ両氏の論考をめぐる論争

1. ブズガーリン氏らの論文「リベラル派マルクス主義は我々に必要か？」
2. 『経済の諸問題』誌討論会「マルクスの遺産と現代経済学」
(以上 本号)

III. 論争によせて

(Ⅱ-2の討論会の続きとともに続いて掲載の予定)

II. ガイダール、マウ両氏の論考をめぐる論争

ロシアでは科学アカデミー経済研究所の雑誌『経済の諸問題』2004年5、6月号に「マルクス主義：科学的理論と“世俗的宗教”のあいだ(リベラル派の弁明)」と題するガイダール、マウ両氏の長大な共同論文が発表されるや、たちまち同誌上に激しい論争がまきおこった(なお両氏の論文の内容はすでに本誌の第54巻第6号で詳しく紹介した)。すなわちその後直ちに同誌2004年7月号にA. ブズガーリン、A. コルガーノフ両氏の共同論文が現れ、次いで9、10月号にはL. グレブネフ氏の論文が連載され、さらに12月号にV. クドロフ氏の論文とN. ロザノワ、A. ナザレンコ両氏の共同論文が続き、いずれもガイダール、マウ両氏の論文の主張するところに対してそれぞれの見解を展開した。そしてこのような論争を取り敢えず締め括るものとして、同誌編集長L. アバルキン氏司会のもとに「マルクスの遺産と現代経済学」というテーマの討論会がひらかれ、その内容が2005年の1月号と2月号の同誌に掲載されたのである。ところでこれら諸論文のなかではA. ブズガーリン、A. コルガーノフ両氏の共同論文がガイダール、マウ両氏の共同論文の内容を真っ正面から本格的に批判しているものなので、本稿では他の諸論文はしばらくおき、この論文を取り上げてその内容を紹介、検討し、そのあと上述の討論会の内容を検討することにした。

1. ブズガーリン氏らの論文「リベラル派マルクシズムは我々に必要か？」

すでに以前の号で述べたとおり、ガイダール、マウ両氏の共同論文はマルクシズムの19世紀前半の誕生以来の発展の歴史を資本主義の現実の歴史的経過のなかであとづけたあと、生産関係は生産力の性格によって規定されるというマルクシズムの歴史哲学の根本命題に従うならば、20世紀末以後の現代のポスト工業化社会においては、自由市場経済が最もふさわしいものであるとし、自分たちのそのような立場、主張を「リベラル派マルクシズム」と称するのである。これに対して「リベラル派マルクシズムは我々に必要か？」と題するブズガーリン氏らの論文の趣旨は、マルクス、エンゲルスの予言は実現せずソ連の社会主義建設は失敗したというガイダール氏らの主張は根本的に間違いであって、ソ連の社会主義建設はマルクスに従ったものでは全然ない、そこでの「計画的」、「全人民的所有」などというのはまさにマルクス、エンゲルスが反対していた「兵営社会主義」なのであったのだ、ところがこれに対していまのポスト工業化社会でこそまさに人間疎外から解放された、創造的労働に基づく真の社会主義を建設する前提条件が形成されつつあるのだというのである。以下もっと詳しくブズガーリン氏らとその論文で主張しているところを見ていこう（なおブズガーリン氏はモスクワ大学教授、コルガーノフ氏は同大学先任研究員であるが、ブズガーリン氏の著書の一つは邦訳されている——田中雄三訳『21世紀とコミュニズム』、1998年、リベラタ出版。ちなみに『経済の諸問題』誌上のこの論争には両氏の他にも多くのモスクワ大学経済学部出身者が参加しているが、その中にはあまり水準の高くない発言も見られるのはいささか残念である。以下ブズガーリン氏らの論文のあらましを見ていくが、1)、2)…といった項目立ては原文には全然なく、小檜山が便宜的につけたものにすぎない。)

1) 徹底した自由経済主義者であるガイダール氏らがマルクシズムのいわば「不倶戴天の敵」である K. ポパーや F. ハイエクを引用するだけでは足りなくて、何故わざわざマルクシズムを持ち出すことが必要だったのか——ブズガーリン氏らはその批判論文の冒頭でこのように問題を切り出す。そしてこの疑問は次のような実態を理解すればはっきりすると言う。つまり実際にはガイダール氏らはマルクシズムの全体を受け入れようとしたのでは全然なく、その一部を受け入れただけで、それ以外の全てについては詳しい念入りの批判を加えようとしているのだと。ブズガーリン氏らのこのような指摘は「当たらずといえども遠からず」と言ってよからう。

ガイダール氏らの言い分は20世紀の社会の歴史は、マルクスが19世紀中葉に予言したようにはならなかったではないかというものであるが、しかしこれに対してブズガーリン氏らは、既に述べたようにソビエトの失敗の経験をもってマルクスの予測の誤りとみなすのは明らかに間違いである、というのはソ連の「計画的」とか「全人民的所有」などというのはマルクス、エンゲルスが激しく反対した「兵営社会主義」の典型であって、決してマルクスの考えに従ったものではないからだと言う。そしてブズガーリン氏らは、マルクスの思想のなかの、労働の資本への形式的従属からの解放には私的所有の廃棄が必要であり、実質的解放には分業と機械生産への従属状態の克服が必要であって、こうしたことが全面的な創造的活動への移行の基礎になるということ、また物質的生産の「彼岸」にある「自由の王国」への移行には、自由な時間の増大、個人の全面的な発達、強制と階級支配の用具としての国家の死滅などが必要であるという命題に注目するのである。

2) ブズガーリン氏らは歴史の進行, その新しい展開とともに, 社会主義革命についてのマルクシズムの展望にも必要な訂正が加えられて当然だと言う。初期工業化段階の資本主義においては世界的な規模の(つまり当時の多数の先進国での同時の)社会主義革命が産業プロレタリアートによって遂行されるという命題が存在したが, この命題についても当然同じことが言えるとする。そして今日では現存体制の廃棄と新社会の誕生の方途をめぐって絶えず修正され練り上げられていくマルクシズムの研究の幾つものスペクトルが存在するのだと述べている。この点つまり今日マルクシズムの分枝が進み, その幾つものスペクトルが出現しているとするブズガーリン氏らの指摘は非常に興味深い, しかしここでは具体的にどのようなスペクトルがあるのかは示されていない。ちなみに社会主義への展望を放棄したガイダール氏らの「リベラル派マルクシズム」はこのようなスペクトルの中には入らないのであろう。

3) ブズガーリン氏らはさらに, マルクスの予測のうち確かに商品生産の廃棄や計画経済への移行は起こらなかったけれども, 重要なのは資本主義経済の歴史的進化がどういう方向に進んでいるのかであると主張する。周知のとおり19世紀末以来国家, 社会的諸機関, 大企業の側からなされる経済の意識的規制が絶えず増大し, 現在では先進国経済のGDPの35%から55%が国家によって再配分されている。これに加えて市場には環境保護的規制, 社会的規制, 生活安全保護的な規制が多数加えられており, 製品の質に対する社会的規制, 統一された技術的基準, 膨大な量の企業内取り引きを考えてみれば, 100年以上前のマルクスの予測が今日の市場原理主義者たちの予測よりも正確であったことを認めざるをえない, とブズガーリン氏らは述べる。

彼らは続ける。ソ連における規制と計画経済の経験はソ連式の調整方法のマイナスの面ばかりではなくプラスの面も明らかにした(ちなみにその場合の基本的な問題点は意識的な規制を, 社会と個人の発展のための民主的な決定の採択, および変化する消費需要への対応とに結びつけるということなのだ)とブズガーリン氏らは言う)。このプラスの面とはソ連の長期計画の実行によってある程度実現した課題で, それは宇宙開発や, 基礎的科学, 文化, 教育, 保健の分野での成果が物語っている。しかしながらまた, ソビエト経済体制のもとでは功利的な欲求を満足させることはできなかったというのも周知のところであるという。こうした問題は人間の潜在的創造力にもとづいた新しい経済の進行のなかで後景に退き, また寄生的性格を克服した新しい市場, 「連帯の経済」のなかで解決できるだろうと彼らは言う。

ブズガーリン氏らはさらに述べる。労働の解放, 所有の社会化, 抑圧装置としての国家の死滅の必然性などの問題についてみると, この間の「人間性革命」の発展方向や20世紀の歴史の全民主的経過によってこの命題の正しさが確認されている。またホモ・エコノミクスのもつ価格動機というパラメータを捨てた新しいタイプの個人の形成の問題についても同じことが言えると言う。

するとここで次のような諸問題についての研究や論争のための新しい学問分野が始まるとブズガーリン氏らは述べる。それは○「人間性革命」時代のポスト工業化経済がどの程度またどうして功利的な価値や動機を放逐して, 創造的活動, 教育, 自由な時間のもとでの自己実現の欲求を発達させるかという問題。○今日支配的な「後期資本主義」型社会がどの程度またどのようにして人間の資質の改善やグローバルな問題の解決を進められるか, 同時にまたこの社会がいかに超現代的な資源をまず第一に金融的投機, 軍国主義的な抑圧, 大衆的文化の拡大のために利用して

いるかを明らかにする問題。○さらに今日支配的なこの型の社会に対する対案は存在するか、あるとすればそれはどんな対案か、そして最後にマルクス主義の理論と方法論はこれらの客観的な過程を研究し客観的な対案を提示するのにどのように役立つかという問題である。しかしながら後期資本主義の発展傾向を問題とするこのような学問的論争にはガイダール氏らは加わろうとはしない、というのはここには「リベラル派マルクシズム」が出る幕はないからだ、実はここではマルクシズムこそが現存体制の矛盾、限界、非社会性を明らかにし、同時に別の発展の方途を指し示す科学として登場するが、リベラル派にとってはこうした問題はタブーなのであるとブズガーリン氏らは言う。

4) 次いでブズガーリン氏らは「ロシア帝国の社会主義革命」について言及し、マルクスは確かに革命のための最適の前提条件は最先進国に存在するとしたが、しかしだからといってそのような国で最初に革命が起こるということにはならない、革命には客観的、主体的条件の組み合わせが必要であり、そのような組み合わせは20世紀初めには「弱い環」つまり当時のロシアにあった、しかしその革命は前提条件が不十分であったために、一貫性を欠き、退化や反革命の危険性を呼び起こしたのだ、と述べる。これはガイダール氏らの主張に対するこれまでのマルクシズムの常識的見解をもとにした反論なのであろうが、いささか新鮮さに欠け、問題の掘り下げ方の不十分さが感じられる。ガイダール氏らはその論文のなかで「プロレタリアートの権力奪取は資本主義の発展進歩と直結あるいは正比例しないという問題」（本誌第54巻第6号、p.7.）、あるいは「世界革命・世界共産主義体制の成立のないままで遅れた農業国での“プロレタリア革命が勝利した事態”」（同、p.14）について問題提起をしているのであるが、ブズガーリン氏らの言う革命の前提条件とその実現条件とは時間的順序が必ずしも一致するものではないという説明は、10年、20年単位ならともかく、19世紀中葉からの150年間の単位で言うのは無理であろう、やはりこの間の資本主義の変化とそれに応じた革命形態の変化を問題としなければならぬだろうと思われる。

ブズガーリン氏らはまた、20世紀にはマルクス主義理論の論理と精神に従って「世界的改革」が行なわれたと述べる。そのなかでマルクス、エンゲルスがすでに『共産党宣言』で提起しその後すべての社会民主党、共産党が最小限綱領として提起した諸要求の多くが基本的には実現したのだと言う。それは累進課税、遺産相続権の制限、運輸交通の国有化、児童労働の禁止、無料教育などである。これらの改革は階級闘争の圧力と革命的爆発の脅威なしには実現しなかったろう、マルクシズムの批判者たちはこのことを忘れてはならないとつめよっている。

5) ブズガーリン氏らはさらに労働者階級の貧困化の問題に言及する。ガイダール氏らは工業労働者が資本主義のもとで貧困化して体制の交代を目指すようになるというマルクシズムの見方は事実にそぐはない、19世紀末以来労働者階級の生活は良くなっていき、彼らは革命的勢力ではなくなり、ポスト工業化社会では特別な階級ではなくなったという。これについてブズガーリン氏らはプロレタリアートの絶対的貧困化という問題の立て方はたしかに誤りで、マルクスの資本蓄積法則によればこのような絶対的貧困化を必然的な支配的傾向とは見なさないことができると言う（このマルクス解釈には筆者小檜山も賛成である）。それは資本主義では不断の技術進歩にともなって労働力の価値の上昇があるからであるし、そもそも激しい階級闘争の結果労働者の生活改善がもたらされるからだとしている。

そしてブズガーリン氏らは言う。ガイダール氏らは雇用労働者とその同盟者の資本にたいする

不断の多面的な闘争に対してこれを頑強に無視しようとしている、それはこのような闘いは合理的・利己的・私的経済人による資本主義の自己成長という彼らの図式には入らないからだという。しかしこの闘いは20世紀の進歩の最重要な要因であったし、そのことはまた資本は勤労者の側からの組織的抵抗に遭わなければそれだけ経済的、社会的、政治的圧迫を強めるというマルクスの周知のテーゼの正さを確認しているとする。さらにそれはまたこれまでのこうした闘いの成果に対するグローバル資本の最新の攻撃を見ても明らかだという。要するにブズガーリン氏らの言うように生活の向上と社会の進歩を目指す国民の闘いが歴史の進歩の根本要因であるということが、ガイダール氏らの「リベラル派マルクシズム」の歴史哲学、歴史分析には全く欠如している事実こそが彼らの致命的欠陥であって、この点をつよく指摘したのはブズガーリン氏らの大きな功績であろう(本誌第54巻第6号, p.6. 参照)。なおブズガーリン氏らは最近創造的なマルクシズムが「対案グローバル化」と呼ばれる社会運動と対話を進めていることを評価している。この運動は民主主義、経済的公正、環境保護、人権を、経済中心の新自由主義的経済思想よりも重視した上でグローバル化を支持するものとされている。

6) ガイダール氏らの論文中的基本的問題の一つは、20世紀とくにその後半の経済発展は経済関係が生産の物質的基礎の進歩に依存すると言うマルクシズムの一般的な法則性は確認したものの、しかし他方でマルクシズムの学説に基づく予測や結論についてはその大部分が当たらなかったとする点があるとブズガーリン氏らは言う。論文の三分の一がこの問題に費やされているが、しかしその大部分はマルクスに対する批判というより、かれらの見た20世紀の社会経済の歴史の叙述であるとする。そしてこの部分では20世紀におけるマルクシズムの危機ということがはっきりとされている。ガイダール氏らによれば危機の原因は、マルクス主義者たちが生産の集積、集中という生産力の発展傾向を絶対視し、かつこのような生産力の発展は革命によってしか解決されえない危機に資本主義社会を導かざるをえないという間違った考えをもったことだと。しかし実際には20世紀に先進国では革命は起こらなかった、それはこれらの国では社会的妥協を通じて変化する条件に十分に対応できたからである、一方であれこれの革命的変動が起こったところでは、より進歩的、人道的な社会ではなく、独裁的、全体主義的体制が生まれた(ロシア、ドイツ、アルゼンチン)と。このようにガイダール氏らは言うのである。

これに対してブズガーリン氏らは言う。20世紀後半にマルクシズムが危機に陥ったという事実を否定するのはばかげているだろう。問題はその危機のもとは何であったのかである(実は日本のマルクシズムにとってはその一番の原因はソ連における社会主義の失敗である。したがってその外的、内的原因を究明することこそが最大の課題である—小檜山)。それは果たしてガイダール氏が言うように資本主義社会が他の体制に革命的に転化するとしたマルクシズムの見通しが根本的な誤りであったためなのか、とブズガーリン氏らは議論を続ける。それともこのような革命的転化の条件や時期についての具体的・歴史的判断が間違っていたのか。つまりそれはマルクス、エンゲルスがもっていた知識の不可避的な歴史的限界から生まれ、かつその後継者達によって適時に訂正されなかった誤りという問題であるのかということである。そして実はブズガーリン氏らによるとさらにまたこの歴史的限界のためにマルクス、エンゲルスは工業化の全面的展開の時代における生産社会化の歴史的・具体的形態の意義を、過大評価していたというのである。しかしこれはその後訂正されたとブズガーリン氏らは言う。そして工業化という発展段階は資本主義にのみ相応

するのであって、資本主義が新しい社会体制に替わるための前提条件はむしろ社会がこの段階を脱け出した時にのみ形成され得るのだということ、従ってその場合社会化の過程は別の形態で進むだろう、つまりマルクスが例えば経済学草稿で予言したような科学の産業への広範な適用にともなう新しい性格の労働のもとで、社会化の過程はこれまでとは違った形態のもとで進むだろうということが明らかになったとブズガーリン氏らは言うのである。そしてまたこれに応じて体制移行の社会的条件についての考え方の再検討が始まったという。なおここでブズガーリン氏らは括弧して（労働者階級の歴史的使命についての考え方）という言葉を入れているのだが、それについて何の説明もしていない。しかし前後の文脈から見てこのような歴史的使命についても再検討が始まったという意味なのであろう。ところで筆者小檜山が思うに、ここでブズガーリン氏らがポスト工業化段階における社会主義のための生産の社会化は、工業化段階での社会化とは違った形態で行なわれるという洞察を示唆していることは、日本の社会の未来を構想するためにも非常に貴重で重要な点であろう。社会主義のための生産手段の社会化は生産の社会化を導くものであろうが、実はこの社会化がこれまで考えられていたものとは違ったかたちで進められるというのは、極めて新しい重要な命題と言うことができ、例えば市場経済を通じて社会主義に進むという構想もその重要な一部であり、この命題を掘り下げて研究していくことは現代の経済学の最重要な課題であると言っても過言ではなからう。

さらにブズガーリン氏らは続ける。ところで重大な問題はこれらの「修正主義的」な考えはみなソ連の政治指導部にとって都合の悪いものであったから、一般に広まることがなく、マルクス理論の公式解釈の権利をもつと自称していた人々によって猛烈に排斥されたしまた排斥され続けていると。またブズガーリン氏らは言う。資本主義が社会主義社会に革命的に転化するというマルクス主義の理論が間違いだともし言うことができるとすれば、それは資本主義が工業化段階というその技術的基礎を脱け出し、かつその次のポスト工業化段階になってもなお首尾よく存続できるということが明らかになった場合にのみ初めてそのように確言できることだろうと。社会がポスト工業化段階に入った今になって、ブズガーリン氏らが昔ソ連では資本主義の技術的基礎である工業化段階で、いわば早まって社会主義を建設しようとしたという「早まった過ち」を犯したのだともとられかねない意味のことを言うのは、いわばあとから当時のことをあげつらっているという感をまぬかれない。ソ連における社会主義の失敗はまず第一に当時の状況の克明な調査、研究に基づいて解明されなければならないだろう。

7) そのあとブズガーリン氏らはガイダール氏らが20世紀後半のマルクス主義の危機をその歴史哲学の原理上の危機ではなくて解釈上の危機とし、かつそこで三つの誤りがあったと指摘している（本誌第54巻第6号、p. 11 参照）のに対して次のように反論している。その第一の誤りとされているのは共産主義をもって「歴史の終わり」とするテーゼであるが、マルクスは共産主義社会を人類の歴史の新しい偉大な時代の始まりとし、そこでは階級的不平等に基づく敵対状態がなくなるというのである。ガイダール氏らはポパーなどと違ってこのことを熟知していて試験でも5点満点をとった人間なのだから、マルクス主義にフクヤマ式の「歴史の終わり」を押しつけようとするのは、事実の改竄というしかなからうと述べる。ガイダール氏らのいう第二の誤りは、歴史の5段階区分の絶対化であるが、ブズガーリン氏らはソビエト時代の「マルクス・レーニン主義政治経済学」の枠のなかでさえも同一の構成体の中での生産関係の進化について研究さ

れていたし、類似の生産力水準のもとでの違った社会関係の存在についても無視されてはいなかったと反論する。第三の誤りというのは、社会の経済的、政治的諸形態が社会の物質的、技術的基礎に能動的な影響を与える点が十分評価されていないということだが、もちろんソ連の政治経済学にはこの問題についての形式的な捉え方もあったが、同時に生産関係が生産力の発展に及ぼす影響についての真面目な研究も少なくなかったとブズガーリン氏らは反論している。

8) 次に後進国のキャッチアップの方途の問題が出てくるが、ブズガーリン氏らはガイダール氏らのこの問題に対する分析のアプローチは後進諸国の経験を単に概括しているだけで、その後進性の原因とか世界経済内の位置などについての法則的分析が欠けていると批判する。これに対してマルクス主義は世界資本主義経済が先進的「中心諸国」と後進的「周辺諸国」とにいつまでも分かれている原因を次のような問題と結びつけて考えるとブズガーリン氏らは言う。その第一は「中心諸国」と「周辺諸国」それぞれが世界資本主義経済に加わった時の歴史的条件の差異、第二は植民地時代およびポスト植民地時代に世界資本主義経済が後進国の伝統的社会基盤に及ぼした影響の結果生じた社会経済構造上の経済成長の限界性、第三は「中心諸国」が世界経済におけるその地位を利用してこのような差異を固定させようとするためのいろいろな可能性である。

9) さていよいよブズガーリン氏らはその本題に移る。それはいまや始まりつつあるグローバリゼーションとポスト工業化の時代が質的に新しいタイプの社会への移行を必要としているということ、どれだけマルクス主義が立証することができるか、それとも現代生産力によってもたらされるのはまさに一層の市場と資本の進歩発展のみであるとする「リベラル派マルクシスト達」の主張が正しいのか、という問題であるというのだ。

ブズガーリン氏らはグローバリゼーションの問題から始める。そもそもどんなマルクシストでも反グローバリゼーションのイデオロギーと政策はマルクス主義の文言と精神に反するというガイダール氏らの言い分に同意するのは当然である。ところが例えばロシア共産党のG. ジュガーノフ氏はそれと違ったことを述べているのではないかとガイダール氏らは言うが、しかしジュガーノフ氏はロシア共産党という名前の組織を率いてはいるが、決してマルクシストではない、自分でもそう言っているし、またロシア共産党のなかには公然たる反共的言辞が横行しているとブズガーリン氏らは指摘する。また左翼に反対する勢力は最近10年近く繰り広げられた運動を「反グローバリゼーション運動」と呼ぶが、しかし左翼自身はこうしたレッテル貼りを正当なものとしたことは一度もない。彼らはその運動を「対案社会運動」或いは「対案グローバリゼーション運動」と呼んでいる。それなのにガイダール氏らはマルクス主義的左翼の立場（つまり「対案社会運動」）と、実際にそうである反グローバリゼーション運動の立場を混同している。この後者の中には「左翼的」民族主義的潮流や右翼的ポピュリズム、さらには反動的な宗教原理主義的潮流が入っているとブズガーリン氏らは指摘している。

ブズガーリン氏らは言う。マルクシストは資本主義のグローバリゼーションを一つの客観的な社会経済的過程であることをはっきりと認める、また搾取も客観的な経済的現象であることを認める、それどころか一定の歴史的な枠のなかでは搾取も人類の経済的、社会的進歩の条件となるのであるとする。にもかかわらずマルクス主義は、一方の社会グループが他方のグループを抑圧することによってのみ人類が発展していくような諸条件の克服を目指す闘いもまた進歩的かつ客観的なものと見なすのである。もしガイダール氏らにこのような弁証法が気に入らないならば、

かれらは自分たちが「合法的マルクシズム」と同類であることを率直に認めるべきだろう、それはマルクシズムのなかから資本主義の客観的、歴史的進歩性を承認する部分だけを取り出し、その結果括弧付きなしの本物のマルクシズムと呼ばれる権利を失ったものごとである（「合法的マルクシズム」という用語のことについてはともかくとして、ここでブズガーリン氏らは筆鋒鋭くガイダール氏らの立場の本質を突いているといえよう——小檜山）。マルクシズムのなかには国際的生産社会化の資本主義の形態を克服するために左翼勢力が闘うことを禁ずるものは何もないが、この闘いはこのような形態が客観的過程としてあることを認めながら、同時にその歴史的限界を見てそれをもっと進歩的なものに替えようとする闘いなのである。左翼勢力は「対案社会運動」の民主的、人道主義的諸目標の完全な達成は資本主義の枠内では不可能であること、資本主義的グローバリゼーションの諸矛盾は資本主義体制全体の矛盾の一層の深化と発展を物語っていること、また資本主義の革命的改造という歴史的展望についてのマルクス主義的問題提起を決して課題から引き下ろしてはならないことを、たゆまず強調する。この展望を十分明白に示しているのは「対案グローバリゼーション運動」の中心的スローガン「もうひとつの世界が可能だ！」である。「世俗的宗教」という独断を大声で叫ぶことによってこのような現実とのあいだに垣根を設けてはならない！

ブズガーリン氏らは続ける。ところで資本主義的グローバリゼーションの現実の発展過程は、「市場民主主義」のもとでグローバリゼーションは社会的闘争の緩和をもたらすというガイダール氏らの論文で描かれた美しい姿とはどうしても折り合わない。事実はその逆のことを物語っている、すなわちグローバリゼーションはその対象とされた諸国でも、またグローバル経済のなかで支配的な地位を占めている諸国でも社会的闘争の激化を呼び起こしているのである。多国籍企業はグローバリゼーションを全世界的規模での資本の活動の制限撤廃のための当然の手段として見ている。その際まず第一に金融資本がどこにでも移動できると言う点が大きいの。その結果多国籍企業は搾取のために最も有利な条件を求めて活動の場所を定めることができる。その不可避的な結果は後進国の賃金切り下げと先進国労働者の所得圧迫であるが、それは労働立法や社会保障の弱い後進国への資本の輸出ないしそうした輸出の脅かしをたてにして行なわれる。これは新自由主義的現代グローバリゼーションの不平等さを示す事実のひとつにすぎない。1990年代には「市場民主主義」という名のもとで資本の側からの社会的復讐つまり「全面的福祉国家」の解体を目指す闘いがまったく公然と展開された。これには1995年のフランスのゼネスト、1990年代末のイタリアの全国的ストなど激しい反撃があったが、やはり1990年代の後半には先進諸国で社会保障費の若干の切り下げが始まった。ブズガーリン氏らはこの間の事態の経過についてこのようにいろいろ述べている。

10) さて次にブズガーリン氏らはいよいよ最近数十年間に起こった生産力の進歩の問題を取り上げる。それはポスト工業化段階の現代経済社会の本質をどう捉えるかという問題に関わっている。論敵ガイダール氏らは、いまやマルクシスト達が陥った袋小路は、19世紀とは根本的に違った生産力が生まれているにもかかわらず、これまでと同じタイプの資本主義的生産関係が存在していると認めなければならないという点だと挑発する（本誌第54巻第6号、p.16）。実はガイダール氏らの激烈なマルクシズム攻撃と新自由主義の賛美はまさにここから始まるのである。

それではガイダール氏らのご親切にも我々を陥れてくれた論理的「わな」から脱け出すみちを

探そう——とブズガーリン氏らは反論を開始する。第一に19世紀との違いの激しさの程度は正確な科学的検討の対象とするべきものであって、あたかも「19世紀的生産力」に全く代わってしまった「情報社会」とか「知的資本」などといったようなレッテル貼りの対象としてはならない。現代資本主義にはポスト工業化の諸傾向がはっきりと現れてはいるけれども、にもかかわらず基本的にはそれはこれまでと同様に工業化、機械工業の技術基盤に基づいている。すべての先進国ではサービス分野の割合が60-70%を超え、本来の工業生産における雇用は30%以下と言うが、しかし大事なことは支配的な部門と支配的な技術基盤とを混同する初歩的な論理的間違いを犯してはならないということだ。まさかガイダール氏らは喫茶店の皿洗い、ホテルのメイド、商店の販売員——つまり今日支配的なサービス部門で働いている多数の人々がポスト工業化時代の技術基盤で活動しているなどと言いたいわけではあるまい。こうした人々の労働はいまお工業化以前の段階にある（これは必ずしもそうではないが。——小檜山）。サービス分野の雇用の数的増加というのは、工業分野の労働生産性が上昇し、いまなお前工業化段階で大量の労働を必要としているサービス分野へ労働力を送り出しているという事実を反映しているに過ぎない。第二に——とブズガーリン氏らは続ける。現代資本主義にポスト工業化の傾向が存在していることは疑いないが、その一番の表れは工業部門の比重の低下、サービス部門の増加という点にあるのではない。ポスト工業化の傾向というのは工業の労働過程そのものの中で創造的要素が優位を占めていく方向が進み、かつまた非機械的技術基盤（例えば情報技術などを含む）が広がっていくという点にあるのだとブズガーリン氏らは主張する。

11) さらにブズガーリン氏らは言う。上述の生産力の構造変化に伴って生産関係にもまた深刻な変化が起こっていることも間違いない。第一に現代はある意味では資本主義的生産関係の発展のクライマックスにあると言える。グローバリゼーションとともに単なる世界市場ではない世界経済としての資本主義が遂にいまや形成されつつあるし、同時にまた最近まで完全には資本主義化されてはいなかった数少ない生産分野つまり知識の生産と科学の産業的応用の分野が資本主義的レールの上に移されつつあるのである。第二にこのクライマックスのなかで商品生産と資本主義のいくつかの基本的特質が自己否定される過程が始まっている、少なくともそのような自己否定を押し進めるような諸矛盾が形成されつつある。生産や資本の専門化と集積のためよりもむしろ労働の内容そのものの変化のために起こったところの生産の社会化の新しい過程は、19-20世紀境界期に独占がもたらしたと同じように商品生産関係の破壊の方向に作用している。現代の生産過程は私的労働に基づくものとはますます言えなくなっている。これは国営部門や社会的インフラストラクチャーの役割の増大や、現代グローバル経済でのM&Aつまり企業の吸収合併に見られるような多くの部門での資本の集中と関わっている。しかし現代に於ける私的労働の破壊は独占的部門の問題だけではない。労働の内容が変化して知識や情報の役割の増加を伴う創造的要素が増えてくると、労働は普遍的なものに、つまり事実上地球上のどの地点でも起こる創造的過程に依存する、従って知識の相互作用に全面的に依存するような普遍的なものになる。この相互依存性は労働生産物の市場における交換によって形成されるのではなくて労働過程そのもののなかで形成されるのであるとブズガーリン氏らは言う。この辺はブズガーリン氏らの理論に特徴的なところである。

労働過程が知識の産業への応用に、従ってまた新しい知識の創造に依存するようになったこと

は、生産が市場の景気変動に依存する際の性格を変えることとなった。科学研究費の相当部分が予測可能な成果や市場の現在の需要とは関わりなく、せいぜい潜在的可能性のある新製品市場の形成を目指して支出されるようにさえなった。企業の研究開発費の一部は一定の何らかの成果を期待することなく行なわれ、そのために全く非市場的性格を帯びるようになった。従って市場の流動性や変動性、また工業化生産物の増大は、市場の変動に対する柔軟な対応にもとづくだけではなく、ますます自由な創造的探究に依るようになったが、その成果はその後市場の基準に従って供用されることになっているのである。ここにいたって現代の資本主義的商品生産は、高度専門家やプロフェッショナルたちの自己実現志向に基づく開かれた創造的探究の基準が、企業に利潤を保障する限られた市場を探求する基準と矛盾するような時期に入ったのである。こうしたなかで、資本は創造的探究のための出費を市場形成可能なところに予め制限し、創造的活動家の自己実現能力を狭めようとしている。専門家達の特権的地位がしばしこの矛盾を緩和してはいるが、しかし根本的解決は不可能である。ブズガーリン氏らはこのように述べている。

12) さらにブズガーリン氏らは続ける。問題は先進資本主義経済における消費モデルの変化とならんで人間活動の性質の変化が、人間の消費構造の変動とともに労働のモチベーションの変動をもたらしたことにある。労働のなかで創造的機能が多くなり、労働が自己目的的なものになると、労働による自己実現が活動の指導的動機となった。しかし労働の基本的動機として物質的福祉を求める気持ちが弱まってきたことは、労働の内容の変化に依るだけではない。実はこうした変化のもう一つの不可欠の条件は人間の物質的消費の充足の程度が高まったということである。そのために創造的能力の実現という欲求が前面に出てきたのである。このようにして人間の欲求の構造および人間活動の動機の体系のなかで、外面的な方向ではなくて直接人間自身の発達のための欲求や動機を重視するような変化が起こってきたのである。経済の発達水準や最新技術の性格とも結びついたこれらの変化は、結果として労働力の質の変化を生みだし、それはまた労働の組織や育成に対する新しい要求を呼び起こしている。人間活動の生み出す生産物の性質、また使用される資源の性質の変化の面でも商品経済の破壊は進んでいる。情報社会の発達に伴って生まれた新しいタイプの「資源」や欲求は人間の活動の内容の質的变化と直接関わっているのである。

言うまでもなくこうしたいろいろな傾向は、現在支配的な資本主義的關係からの影響を受けているために現代資本主義において圧倒的な地歩を占めているわけでは決してない。にもかかわらず市場的、資本主義的基盤が、古い資本主義的形態にあきたらずその中に非資本主義的諸要素を生み出そうとしている新しい生産力と衝突しているプロセスを観取することができる。こうしてポスト工業化的諸傾向は、資本主義の基本的生産関係の本質を変えはしなかったものややはりその著しい進化をもたらすものとなった。その進化とは非資本主義的諸要素の成熟であり、またこの諸傾向は将来的には恐らく資本主義的生産関係がより進歩的な方向をもった過渡的な生産関係へと転化するものになるだろう、とブズガーリン氏らは言うのである。

さらにブズガーリン氏らは言う。まさにこのような諸傾向を見れば、資本主義の社会主義への転化の展望の問題に目を閉じるわけにはいかない。ガイダール氏らがポスト工業化社会のもとの共産主義への可能性に対して一線を画してしまうやり方は、なんら本質的な論拠もなしに問題を紛糾させるだけである。マルクシズムにおけるポスト工業化社会と共産主義との結びつきは、ガイダール氏らが好む社会の質的移行の原因に関するマルクスの社会・歴史方法論一般に基づい

ている。マルクシストは上述のポスト工業化諸傾向の中に新しい社会への移行の前提条件を見いだしている、この移行とは共産主義社会への移行というのと同じことだが、この新しい社会とは今予め言うならば「ポスト経済的」社会構成体と考えることができよう、——ブズガーリン氏らはこのようにその持論を展開するのである。

13) さてこのように述べてきたブズガーリン氏らは、結びの節で次のようにまとめている。現代の批判的マルクシズムは、古典的マルクシズム以来の原則つまり将来展望の問題に対して開かれた性格を持っている。我々は最終審判を下す救世主の役割を演ずるつもりはない。我々はただ革新されたマルクシズムの方法論と理論を歴史特にその最新の段階の現実のプロセスの研究に適用して、こうした作業がどのようにマルクシズムを変貌させるかを示そうとしているだけである。こうした自己批判と変貌がなければ、マルクシズムはドグマと化してマルクシズムたることを止めるであろう。

リベラル弁護論者達はマルクシズムがあたかも厳しい決定論であるかのように言って批判しているが、実は結局かなりいい加減なかたちの決定論を取り入れようとしているだけである。技術の進歩と社会の富の増加とともに社会形態が変わるといのはかなり月並みな考えであって、そのためにはマルクシズムは不要である。そもそもマルクシズムの歴史哲学というものとは極めて複雑で多面的な現代的理論である。そこでの問題として生産力と生産関係の弁証法的相互作用、疎外のもとになっている諸力がどのように人間を支配しているかという問題、人間自身が改革・革命を通じてどのように歴史を作っていくのかという問題、社会的解放のためには物質的生产力の進歩に劣らず重要な文化の自由な発展など精神的生産の弁証法の内容等々があるが、しかしこれはマルクシズムの仕事のごく簡単な一覧表であるにすぎない。だがマルクシズムの方法論と理論を科学的研究に適用しようと真面目に考えている人々にとってはこうした諸問題は批判的に分析していく価値があるのではないだろうか。

そしてブズガーリン氏らは次のように言う。19、20世紀の英雄的、悲劇的な全ての事件に積極的に参加してきた現代マルクシスト達は、歴史の過程は具体的なそれぞれの国、それぞれの時代において直線的に進むものではない、歴史には逆転や後退の流れもあり、人類は今反動的な国の方向に進む乱流の中にあるということを理解している。けれども我々は歴史のリアルな長期的諸傾向を分析することができるし、また今後も分析していくであろう。その諸傾向とはこれまで我々が示そうとしてきたように、「必然の王国」から「自由の王国」への全地球の転換という長いしかも非直線的な過程のなかで、生産力の発展があらゆる形の疎外から人間を実際に社会的に解放する必然性をみちびくという結論の正しさを確認するものなのである。

そしてブズガーリン氏らはその論文を次のように結ぶ。こうして「リベラル派マルクシズム」とこの論争はガイダール氏らの論文の枠を超えてしまった。その対象は現代マルクシズムの科学的存在根拠および一般的には疎外の世界、具体的には現代後期資本主義の限界性を示す理論が正しいかどうかの問題となっているのである。ここではリベラル派のハイエクやポパーを引用してみても始まらない。ガイダール氏らは、幸いハイエクらが全能だとまでは言わない常識を持ち合わせていたようだが、しかしながら彼らは現代マルクシズム思想の最も創造的で首尾一貫した部分を公然と攻撃する学問的勇氣は持ち合わせてはいなかったようであると。

2. 『経済の諸問題』誌討論会「マルクスの遺産と現代経済学」

『経済の諸問題』誌編集部が主催して2004年10月に開かれた討論会の内容が翌2005年1,2月号の同誌に詳しく紹介されている。討論会のテーマは詳しくいうと——現代におけるマルクス主義経済理論の重要性と人類の未来に対するその予測能力についての諸問題——というのである。この討論会の発端はこれまで本稿が詳しく取り上げてきたガイダール、マウ両氏の共同論文であるとされている。そしてこの討論会には関連諸論文の筆者達や同国の指導的経済学者達さらにはマルクス学専門家達が招かれたと同誌は述べている。以下同誌に従ってこの討論会における発言の要旨を見ていこう。（なおこの論争は『ロシア・ユーラシア経済調査資料』第876号、2005年6月号に紹介されているが筆者未見）

L. アバルキン（アカデミー会員、『経済の諸問題』誌編集長）

マルクスの学説には過去、現在、未来がある。これまで私はそれについての論争を組織するのは時期尚早だと考えていたがすでに論争が始まってしまったわけである。マルクシズムを研究するのは三つの点に注意することが必要だと思う。それは言うてみれば段階、プリズム、評価ということである。

第1の点。マルクシズムはどのような他の科学的理論とも同じように進化発展の中にある。それは決して社会思想の頂点ではなく、その進化発展の中の一つの段階に過ぎない。それが社会的認識の頂点であるというような観念は、18-19世紀に形成された社会進歩の直線的理解といった方法論にその根源がある。このような社会科学のパラダイムのもとには、ニュートンの天体力学、スミスの経済学論理、ヘーゲルの哲学から生まれている。マルクス、エンゲルスは我々よりも100年以上も前に生きて仕事をしたのだ。従って今日我々が社会生活の中でぶつかっている多くの次元の諸問題や諸状況の説明をマルクシズムに求めるのはまず無理なことであろう。自然科学など他の全ての科学と社会科学の原則的な違いは、精密科学では研究の方法が改善されるだけで研究対象は原則的には不変なのに、社会科学では分析の方法だけではなく、対象そのものが変化することだ。今日の世界はマルクシズムを生み出した認識のパターンに表わされたようなかつての世界とはひどく違っている。こうして対象が変わった以上思想、社会意識、歴史哲学、経済理論も変わらないわけにはいかない。マルクシズムが科学であるならばそこには必ず知識の陳腐化、それまでの考えの否定が起こるのであって、科学というものは新しい経験によって豊富になり、定説は再検討されるものである。もちろんもしマルクシズムが宗教ならば何も変わらないだろう。そしてまた今日問題は単に科学の研究規範の遵守ということにあるだけではない。いま我々は20世紀の経験を考えに入れた、これまでとは根本的に違った社会科学の質的に新しいパラダイムを作り出す必要性に迫られているのである。

第2の点。人々のマルクシズムについての見解にはいろいろな違いがあったし、いまもあるし、これからもあるだろう。しかも各人があれこれの問題についてのその解釈が絶対正しいと思っている。何故こういうことになるのかということマルクスもエンゲルスもその生涯のなかのいろいろな時期の特徴や知的進化の諸段階や社会状況の変化を反映して、それなりにそれぞれ違った意見を述べているからだ。しかも彼らの理論を扱う人々はそれを単にコピーしているのではない。学

者というものは常にそれぞれのプリズム、彼自身の見解のプリズムを通して理論的な思想を理解する。理論的な思想が屈折するこのようなプリズムの性質を把握することは人文科学上の研究の最も難儀な課題である。この点で目下我々は確たる前進には程遠いところにある。

最後に第3の点。この点は一番複雑でまた重要なことだが、実はこの点が過去および未来のマルクスズムに対するいろいろ違ったアプローチが存在する原因である。ここでの問題の本質は真理の独占的所有の権利を否定することなのである。自分だけが真理を語るができることと称することは科学を袋小路に導くことである。既成の真理ではなくて、真理の探究こそが創造的で絶えず革新されていく社会科学の源泉である。自らが絶対的真理を持つと称するどのような学派もそれは科学としてのステータスを失っているのである。ここで「貧乏で病気であるよりは健康で金持ちである方がよい」というよく言われる諺を思い出すとよいだろう。たしかにそれは結構だがちょっと言い換えてみよう。健康で貧乏なのと金持ちで病気なのとではどっちがよいか。そうなると年齢、健康状態、蓄財その他の価値基準に応じて答えはまちまちになるだろう。なぜそれぞれに違うのかと言えば、ここでは決して同じではない価値判断という要素が入ってくるからだ。価値判断が加わるところでは、絶対的真理という考えに立つことはできない。(小椋山注。アバルキン氏のいう第1, 第2の点, 特に科学研究の規範の遵守という問題については、至極当たり前のことだけれども、それが肯綮に当たるものと言えるのは、これまでのマルクスズム研究の実情がそうさせているのであろう。しかしながら第3の価値判断の問題については、確かに今日のロシアの社会科学界の状況を反映しているものとはいえ、その相対主義には疑問、検討、批判が加えられてしかるべきであろう。)

Q. アナニイン (経済学博士候補, 科学アカデミー経済研究所主任研究員)

第1の問題。『経済の諸問題』誌上の論争のなかでは経済理論に関わるものは極めて少なくしかも断片的だが、ロシアの社会科学界はマルクスズム経済理論の今日の世界の水準から遅れている。西欧の学界におけるマルクスズムへの関心の波は1968年の学生反乱を契機に高まったのであって、その時に現代のマルクスズムの姿を決めたネオマルクシスト達の新世代が形成された。今日ではそれぞれの雑誌や論文を出している多種多様なマルクスズムの潮流が存在する。その中には西欧経済学の基準に従ってみても極めて権威のある学者達もいる。例えばアメリカの S. Bowles, D. Foley, J. Roemer, フランスの M. アグリエッタの名前を挙げるができる。それで現代ネオマルクスズムの研究プログラムと潮流について若干述べるのが大事だと思う。ただしマルクスの思想そのものを研究と解釈の対象としているマルクス学については触れない。マルクスの理論によってなんらかの現代の実際的なし学問的課題を解決しようとしている潮流を取り上げる。

ネオマルクスズムの1番目の潮流はマイクロ経済学的マルクスズムとでも名付けるべきもので、これはマルクスズムからしかるべきテーマや題材を取り出してその分析に現代のマイクロ経済学的用具を用いようとするものである。こうした研究は労働の搾取、生産部面での紛争、生産部面での支配関係、社会的不平等などの問題に注目している。それは標準的な新古典派的マイクロ経済学や新制度学派とも結びついて、労働や教育サービスの市場、金融市場やその他の各種市場における情報の非対称性等の諸問題を研究しているかなり盛んで確かな潮流である。この潮流がマルクス主義的なテーマや思想の面で影響を及ぼすことによって現代マイクロ経済学を発展させていると

言っても言い過ぎではないだろう。マルクシズムそのものにとっての場合新しいのはやはり分析用具の問題であろう。この方向で活躍しているのはいわゆるアナリティカル・マルクシズムの人達 (D. Roemer, J. Elster, P. Van Parijs その他) であるが、また S. Bowles や H. Gintis も幾つかの研究を行なっている。

ネオマルクシズムの2番目の潮流は動態経済の研究であるが、実はこの問題はいつも経済学者にとって扱いの難しいものであった。現代ネオマルクシスト達はマルクスが利潤率の傾向的低下の法則を分析した際のアプローチに関心をもったのである。その際少なくとも二つの方向を見ることが出来る。その一つの方向はアメリカの D. Gordon, T. Weisskopf 等の唱える蓄積の社会構造の理論、およびアグリエッタ、ボワイエ、リピエツ等のフランスを先頭にしたヨーロッパの学者達のレギュラシオン理論に現れているような枠の中で発達したものである。こうした構想はマクロ経済学的性格をもっている。マルクスが解明した平均利潤水準低下のメカニズムが、これらの理論の中で、現代資本主義諸国における一定の発展の軌道の型 (資本蓄積の構造ないし体制) として扱われているのである。利潤低下の体制と並んで大量生産、大量消費に基づくもう一つの蓄積体制が出現するということになる。そしてこの体制が20世紀中葉に先進資本主義諸国に長期安定成長をもたらしたのであるとする。この場合マルクスの思想がケインズ派や制度学派の方法も取り入れた新しいより広い理論的コンテキストの中に組み入れられているのである。

マルクス理論の正しさを調べようとする計量経済学的研究はマクロ経済学の領域に入るものだろう。こうした研究の興味深い成果の一つは現代資本主義における価格形成は、生産価格という概念に基づく資本論第3巻のモデルよりも純粋な形の労働価値論つまり第1巻のモデルに近いということであった。1984年のアメリカのデータに基づいて産業連関表によって作成されたこの種の研究の結果は次のとおり (と言ってアナニン氏は“Marxian Economics”, Macmillan, 1998年の中に発表された P. Cockshott, A. Cottrel の論文の中の表を紹介しているがその表はここでは省略する)。

ネオマルクシズムの2番目の潮流のもう一つの方向はマルクスの理論の動的な考えを発展させようとするもので、これは価値の大きさを投下労働ではなくて価値の貨幣形態の概念を通じて説明しようとする。こうしたアプローチは1920年代の I. ルービンに始まる伝統を受け継ぐものである (とアナニン氏は言うがそれ以上なんの説明もしていないので具体的なことはこれだけではよく分からない——小檜山)。

ネオマルクシズムの3番目の潮流は新しい方法論にかかわるものである。今日この潮流は複雑系の理論という諸科学に共通の流行の理論と結びついており、ここではマルクスの資本論は複雑な体系の多次元の理論的記述と見做されている。この潮流の代表者達は複雑性理論の指導的研究中心である有名なカリフォルニアのサンホセ研究所と積極的に協働している。彼らの文献の中にはソビエトの著名な哲学者 E. イリエンコフが抽象から具体への上向法について述べたところからの引用など20世紀後半の資本論の方法の研究からの引用が見られるのである。

ネオマルクシズム思想のこうした潮流はみな経済学者マルクスはリカード体系の完成者に過ぎないというよく流布している説を覆すものである。実はマルクスが一番興味深いところはリカード理論の枠を乗り越えたところから始まっているのである。

私の言いたい第2の問題。それはこの論争の議論の仕方の問題である。今日の問題に焦点を合わせようとするために、時々事実や文献資料とは違った非常に主観的なマルクスないしマルクシ

ズム解釈が見られる。

その第1点。それは歴史哲学と経済理論とを対立させていることだ。ガイダール氏らはマルクスの経済理論は古くなりアクチュアルなものではなくなったから、哲学や歴史に重点をおくべきだと強調する。これまで私が述べたことからこうした対立のさせかたは問題だということが分かってもらえればと思う。

第2点はガイダール氏らがマルクシズムの危機をマルクス理論の工業化の論理への「こだわり」によって説明しようとしていることだ。これは恐らくソビエト体制の危機とマルクシズムの危機とを混同した結果だろう。いずれにせよそうした考えは1857-1859年の経済学草稿の中の科学と科学技術の役割についてのマルクスの思想とはっきりと矛盾する。この草稿の中の驚くべき洞察力は100年以上も前に知識に基づくポスト工業化社会の姿を予見していたのである。

第3点はマルクスは最初は「鉄の法則」の支持者であったが後にこの法則を拒否したないし後退したという主張である。しかしこの話は問題が論争の対象となった後に出てきたのであってマルクスをこの点でもとラッサール主義者だったと見做す根拠はない。

第4点。ガイダール氏らの結論は、現代リベラリズムはマルクシズムの最重要の命題——社会の生産力はその生産関係を規定する——を根拠とすることができるということだ。言い換えれば彼らはマルクシズムから「経済決定論」と称されるものを取り入れようとするのである。私はもちろんマルクスの歴史哲学にとってのこの命題の意義を否定しはしないが、こうした思想はA. スミスも述べているのであって、マルクシズムそのものの特徴ではなく、まして創造的マルクシズムの特徴ではない。むしろそれはマルクス理論そのものがよって立つ一般的前提の一つである。だから経済決定論を論ずるのになにもマルクスを持ち出す必要はない。これはマルクスのなかのことも興味深いところではないのである。

最後に、論争の中で最も意外かつ興味のある問題はガイダール氏らの論文の中のマルクシズムと世俗的宗教も含めた宗教との関係の問題である。神秘説に関わりあわないとすれば、これは社会現象についての知識が発生し適用されていくなかでの客観と主観の関係の問題である。ところで問題の一つの側面は歴史過程の理論的構築の場合の問題である。この場合認識の対象の特殊性はその対象が一つだけで同じものが二つとないと言う点である。だから自然科学で作られた科学性の基準がここでは適用できない。従ってここでガイダール氏らがポパーの「反証可能性」を持ち出すのは控え目に言っても幼稚だと言える。

問題は別の処にある。ここでは科学性の基準が適用できないとすれば、個性的現象についての科学は何が可能で、またどうあらねばならないのか。もちろんこれは簡単に言いつくせる問題ではないがここでは幾つかの点を指摘しておこう。第一に一般的な歴史的概念ばかりでなく過去の偉大な経済学者達の理論も実際は具体的な階級のつまり個別のないし少なくとも小数の過程や現象についての理論だということである。第二にこの特殊性こそがまさに社会学、経済学、そして一部歴史学の威信喪失の原因であったのである。その結果現代経済学ではこの種の研究のスタイルがずいぶんなくなってきている。第三にこのような研究スタイルを現代の知的水準に合わせて復活するには、価値判断の基礎を定着させることを含めてこのタイプの知識の方法論上の問題を批判的に分析することが必要である。このような分析に当たっての基準点となるのは社会的認識の階級的性質についてのマルクスの思想と新カント派の「価値判断」の原理とを総括することで

なければならない。従って第四に大きな社会経済問題の合理的考察という課題の文脈の中で「世俗的宗教」——イデオロギーと読め——について問題提起することは完全に正当であって科学性の問題にいささかも矛盾しない。科学的探求の障害は価値判断の欠如ではなくてその直接間接の押しつけである。社会的認識のなかで非イデオロギー化できるのは一部の些細な問題だけである。とはいえこのような問題の選択もまた価値判断の対象ではあるが。

S. ザラーソフ（経済学博士，教授，科学アカデミー経済理論および企業論講座主任）

私は論文を読んで正しい点もあるが問題点も少なからずあると思った。ソビエト・マルクシズムに対する批判的アプローチは正しい。しかし資本主義の本性と特徴の科学的解明とそのマルクシズム理論への反映に関する問題では論文には多くの問題点があると思う。今日マルクスの遺産を論ずるに当たってはマルクス自身と19、20世紀のその後継者達とを区別しなければならない。マルクスは人類の知的歴史のなかで比類のない人であって、世界の社会思想にこれほど影響を及ぼした人はいない。シュンペーターがマルクスは単なる学者ではなくて20世紀に最も広まったイデオロギーを作り出した預言者だと言ったのは正しい。マルクシズムというのは資本主義の本性を解明した科学的理論と労働者階級解放のプログラムを提起したイデオロギーの統一されたものである。だからこそマルクシズムは19世紀後半と20世紀の世界の歴史に影響を及ぼしたのである。

もちろん当然ながら時がたつにつれてマルクシズムにもあれこれの不十分さが明らかになってきた。それは何よりも社会主義革命の経過と結果に関わるものである。先進国の歴史の展開についてのマルクスの予測は当たらなかった。つまり先進国が社会進歩の先頭に立って資本主義から社会主義への革命的改造を果たすことにはならなかった。古典的マルクシズムに反して社会主義革命は主としてロシア、中国などの後進国で起こった。それなりの成果は挙げたにはせよこれらの国々は先進国の模範とはなりえず、人間の権利と自由にかけてはむしろ悪例となった。一方で資本主義はマルクスの資本蓄積論では予想されていなかった修復のための余力を発見した。マルクスの予測した革命的爆発のもととなるはずの住民の貧困化は先進国では見られなかった。

これまでの歴史の中でマルクシズムが解決できなかった問題をもつと挙げることができようが、しかしマルクシズムをガイダール氏らが言うように何か科学と「世俗的宗教」の混合物だとするのは根拠がないと思う。それどころか存在する全ての問題の解決を何らかの学問に期待することこそ学問を科学ではなく宗教と見ることであろう。ソビエト時代にマルクシズムはまさにそのようなものとされていた。ガイダール氏らのマルクシズムについての考えもやはりそのようなものであるように見えるが、しかしそれは彼らの罪であるというよりも我々の共通の禍であろう。

驚くべきことはマルクシズムの若干の命題が当たらなかったことではなくて、マルクシズムの世界観の多くの点が歴史の経験によって真実であると確認されたことだ。マルクスは資本主義を民衆に不幸と苦難をもたらす非人間的な搾取制度であると見做したがそれは正しかった。もしそうではなくて資本主義が自由主義イデオロギーが言うように人間の本性に合った調和的社会関係を打ち建てるものであるならば、二度の世界大戦、大恐慌、革命、ファシズム、拡大深刻化している環境破壊などの20世紀の恐ろしい災厄はどこから来たというのだ。現代資本主義のこのような否定的現実をマルクシズムほど深く完全に解明した理論はないと思う。また歴史の中での特に資本の支配のもとでの一般の労働者の喜びのない運命をマルクシズムほどよく描き出した学説

はあるまい。このことに賛成しない者はチャールズ・ディケンズ、ウィリアム・サッカレー、エリザベート・ガスケル、オノーレ・ド・バルザックの作品も一緒に否定しなければならないだろう。周知のとおりマルクスとエンゲルスは彼らを資本主義体制の中の労働者階級の状態を把握するための教師と考えていた。エミール・ゾラやマクシム・ゴーリキーもこれに加える必要かあろうが、いったい彼らの作品の中にあるものは限界効用理論なのかそれとも剰余価値の生産と収奪の理論なのだろうか。

マルクス主義は人々に困窮や苦難から脱却するための処方箋を提供する独特の「社会救済」理論としての魅力をもっているために、純粹の学説として留まることはできなかった。マルクス主義は広範な大衆のイデオロギーになり時とともに彼らの宗教となった。それはともかくとしてソ連でマルクス主義は官製の神学のようなものになっていた。それによってマルクーゼが科学的マルクス主義とソ連の実状との根本的相違について書いたのである (H. Marcuse, *Soviet Marxism. A Critical Analysis*. Penguin Books, 1958.)。ガイダール氏らがこの点について言っていることも正しいが、しかし一つだけ大事な留保をつける必要がある。それはソビエト・マルクス主義は科学と宗教の間にあったのではない、それは科学でもあり宗教でもあったのだということだ。(小檜山注。ザラーソフ氏のこのコメントはガイダール氏らの論文の本質に関わる重要な指摘である。マルクス主義が宗教的信奉の対象であったということの肯定的側面と否定的側面とを区別することが肝要なのである)。

私の考えではマルクス主義の宗教性の原因は学説そのものの内容に求めるべきではなく、その創始者には何の責任もない。それはむしろ後継者や解説者の考え方の特徴のためである。マルクスもエンゲルスも一度もロシアに来たことはないし、一連のロシアの思想家たちとの文通を除けばロシアで自分たちの学説を広めることをしたこともない。けれどもロシアの思想界の特性のために当初科学的理論として受け入れられたマルクス主義はその後だんだんと宗教的教説の性格を帯びようになり、果てはそこからの逸脱は許し難い異端と見做されるようになってしまったのである。

一つの例を挙げよう。1950年代末から1960年代初めフルシチョフの「雪解け」の頃にモスクワ大学で執筆された『経済学教程』に当時の基準とは違った説が述べられると学界から激しい非難が浴びせられた。特に非難の対象となったのは所有形態についての新しい解釈の問題であった。当時はスターリン的解釈のもとで私的所有はだめで国有こそが良いという単純化された考えがまかりとされていた。しかしそれでは実際上の多くの欠陥を説明できないのでモスクワ大学の我々は所有とは一定の階層組織をもった経済関係の複合体であるというマルクスの元の理解に戻ることにした。これを教条主義と批判するのなら或いは当たっていたかもしれない。しかし非難はそうではなくて、当時の正統派的解釈からの逸脱だということが問題だったのだ。要するにマルクス主義のソ連的バージョンは神聖なものとされていて、「世俗的宗教」の性格をもち、客観的、科学的な研究を妨げていたのである。

ソ連時代の悲しむべき経験は今日我々がまた同じことを眼前にしているだけになおさら注意を払わねばならない。我々はいまではマルクス経済学をやめて、こんどはかってマルクス主義を受け入れた時と同じように盲目的に新古典派経済学を受け入れた、これは「火を逃れて(教条主義の)炎の中に飛び込んだ」ようなものだ。しかもソ連経済学は教条主義ではあったがなお現実の諸問題を分析しようとしていたのに、新古典派経済学はそれに劣らず教条主義であるのみならず、

その上基本的には現実と関係のない諸問題を研究しているのである。

この点を説明する前に一言断っておくが、私が批判するのは新古典派の基本的命題つまりハンガリーのI. ラカトシュのいう core assumption に対してであつて、彼のいう protective belt に対してではない。前者は新古典派の世界観的核心であり、後者は補助的仮説である。後者は経済過程の実際的モデルであつて、その現実性は世界観的命題からの部分的な逸脱に基づいている。問題は新古典派の理論構造のもとになっている公理体系なのである。しかし他方 protective belt そのものは理論の社会的側面に関しては中立的なものであるから、他のどの経済学派でも使うことが出来よう。

こうした区別をすると当然次のような問題が提起されよう。そのような公理体系をもった新古典派理論は科学なのかそれとも以前の宗教に代わる新しい宗教なのか？ 例えば新古典派の最も普及している命題——自由市場の効用という問題を取り上げてみよう。まさにこの命題がロシアの改革の基礎に置かれたしガイダール氏らが論文で主張しているものなのである。

周知のとおり改革の主唱者達は中央が管理する計画経済に代わって市場の「見えざる手」つまりその自己調整システムを取り入れるならば、ロシアは未曾有の進歩と国民福祉に到達できると主張した。しかし実際はその正反対になった。ロシアは長い間改革前の生産量を回復できずその経済は先進国に従属する原料供給国に成り下がってしまった。百万長者の数でモスクワはニューヨークを凌ぐまでになったが、夭折者数は年に百万を数える。こうしたことはすべてロシア改革の基礎とされいま「唯一の正しい」経済理論として我々に押しつけられているあの新古典派理論の学問的正当性を疑わせるものである。我々はいま緊急の諸問題を解決することができない、かつての「宗教」よりもっと不明確なものに支配されることとなった。もし我々が真正のマルクシズムがその中で然るべき地位を占めるような真の科学的理論（小檜山注。ここでザラーソフ氏がマルクシズムがその中で然るべき構成部分となる今後の経済学について示唆していることに注目！）を研究するかわりに、エレガントなグラフで説明するが本質は宗教的ドグマであるものを我が国の若者の頭に押し込むならば、彼らは現実の諸問題を解決する力を失うだろう。もし現代のロシア経済の分析に新古典派的方法を適用するならば次のような幾つもの疑問が出てくるだろう。

もし市場経済がその本性上均衡をもたらすものならば、何故ロシアで国民所得が輸出用原料部門に回され、技術進歩に死活的に重要な加工産業部門は衰退するような価格の不均衡が生じたのか。もし限界生産力理論が正しく、資本の生産力の増大が利潤の源泉であるならば、ロシア経済の技術的衰退のもとでの「オリガルヒ」の馬鹿げたほど巨大な収入の増加はどこから生まれたのか。もし完全雇用の条件がいわゆる賃金の弾力性（つまり雇用の減少は賃金の上昇を伴うと言う関数関係のこと）であるならば、何故ロシアで賃金の低下と同時に失業が増加したのか。もし民営化と市場が効率的な所有者を生み出すというなら、何故ロシアではそのかわりに詐欺師や収奪者が生まれ、そのある者は獄中に他の者は逃走中なのか。

新古典派理論が納得のいく答えが出来ないような問題はまだまだたくさんあるだろう。だが我々が今若者に教えている「エコノミクス」——我々が無条件に受け入れたあの経済理論の科学性を疑うには以上で十分だろう。実はこの理論は数学的・図表的美観に反して科学的と言うよりもイデオロギー的性格を持ったものなのである。ロシアに市場経済をもたらした改革の基礎となったこの理論は或る者が他の者を収奪、支配することを正当化するためのイデオロギーとなった

のである。私の考えでは今日支配的な新古典派理論は科学的理論であるよりは、或る者が他の者を支配することを正当化するための階級的・イデオロギイ的装置である。

ロシアの実状の分析とガイダール氏らの論文の検討から出てくる結論は、現実はどうのような理論よりも複雑であって、どんな理論もよし初めは完全に論理的であったにしても歴史の進行のなかで決してその正しさが完全には確認されるものではないということである。これはマルクシズムについても言えるし、ましてや自由主義正統派についても言えることである。ロシアの経験は自由市場と私的所有がどんな場合でも国有と計画経済よりも一義的に優れているとは言えないことを確認した。ある場合には前者が他の場合には後者が効果的なのである。計画と市場は対立させるべきものではなく、経済成長と国民福祉の向上のために巧みに結合すべきものなのである。

T. オイゼルマン (アカデミー会員、ロシア科学アカデミー哲学研究所主任研究員)

ガイダール氏らは経済の専門家であるにもかかわらず、方法論の問題を重視して、マルクシズムの方法論を把握すれば現代先進国経済の中で自由主義的傾向が支配的であるということの根元をより良く理解できるとしている。ところでマルクシズムの方法というのは弁証法とそのカテゴリーの体系である。しかし論文ではこの方法は検討されていないが、実はマルクスの弁証法こそ批判的に研究する必要があるのである。エンゲルスが定式化したような弁証法的法則つまり自然にも社会にも思惟にも同じように通用するような法則というものには存在しない。物理学も化学も他の自然科学もそのような法則を知らない。つまりこうした法則は哲学が発見したに過ぎない。哲学は普遍的な法則を発見することはできない、他の諸科学が発見した諸法則を一般化するに過ぎない。このことはもちろん量と質の相互関係、プラスの否定とマイナスの否定、矛盾といったようなものが結局は存在しないということの意味するわけではない。これらは現実にあるプロセスではあるが、しかし決して絶対的、普遍的法則ではないのである。(小檜山注。オイゼルマン氏のこの発言は全文紹介したが、しかし簡単過ぎてなかなかその真意が掴めないのは残念である)。

ガイダール氏らはマルクシズムを破壊する「地雷」はその二つの分身つまり科学的理論と「世俗的宗教」の間の矛盾だと言う。実際ソ連ではマルクシズムは「世俗的宗教」だった。私はソ連共産党中央委員会書記、アカデミー準会員 D. シェピーロフがモスクワ大学党活動家の会議で「マルクシズムは我々の宗教である」と言ったのを覚えている。そうした考えは上から全社会に押しつけられていたのだ。けれども私の考えではマルクシズムを「破壊する」矛盾が科学性と宗教性の間の矛盾だと考えるのは間違っている。しかし実は残念ながらマルクシズムには内在的矛盾が存在する、それはその科学性とそれに特有の教条主義の間の矛盾なのである。第一にそもそも社会主義が資本主義に対する唯一の可能な選択肢だという思想そのものが教条主義なのである。選択肢は単数ではない、これは選択肢という言葉の意味からしてそうなる。第二にマルクスもエンゲルスもこの理論を経済学的に裏づけようとするずっと前から社会主義者であったのだ。そのような目的意識的なアプローチがマルクスの経済学的研究を方向づけその基本的な偏向を生んだ。ところでまたどのような科学的理論でも修正というのは研究の標準的手続きなのである。マルクシズムの修正が「マルクシズムの革命的本質を骨抜きにするもの」として非難されたことはマルクシズムの教条主義的性格を強める最初の表われだったのである。

ガイダール氏らの論文ではレーニンとボルシェビキがマルクスの学説のどのような見直しにも

反対したとしているが、これは正しくない。よく考えてみるとレーニンも教条主義者でもありはしたが、最大の修正主義者であった。教条主義者として彼は10月革命の少し前に資本主義社会における貧困化についての論文を発表しているが、彼の修正主義とは彼が社会主義革命の前提条件は十分に発達した資本主義の生産力と十分に成熟したプロレタリアートであるというマルクシズムの根本的命題を全く無視したということである。また1905年にレーニンは民主主義革命から社会主義革命への連続革命を主張しているが、しかし彼はマルクスとエンゲルスが既に1850年にマラーに由来する連続革命の考えを拒否していたことを知らなかった筈はない。

ガイダール氏らは20世紀後半に革命的マルクシズムへの関心が薄れたと主張しているが、しかし彼らは19世紀後半と20世紀前半にもマルクシズムへの関心が果たして高かったのかどうか、考えてもみなかったようだ。ガイダール氏らはマルクス・エンゲルスの著作が全世界で聖書に近いほどの部数出ているなど書いているが、A. ベーベルはその「自伝」でドイツの社会民主主義者はマルクスの著作について少ししか知らなかったと書いている。フランスではブルドン主義とブランキー主義が支配的だったしスペインではアナキズムが支配的だった。A. ベーベルはエンゲルスへの手紙のなかでドイツの社会民主主義者は社会主義をマルクスではなくてラッサールから学んだと書いている。最後に。人類史の中でマルクスほど優れた社会思想家はおらず、マルクスの学説ほど偉大なものはない。だがマルクスとは絶えず論争しなければならない。マルクスを最大限尊敬しかつ彼の学説から貴重なものを汲み出すあらゆる努力を尽くしつつ、我々はもちろんマルクシズムの科学的修正を進めなければならないのである。

G. バガトゥリヤ（哲学博士、完全版マルクス・エンゲルス全集 MEGA 国際編集委員会議長）

全体としてブズガーリン氏らの論文の内容に同意した上で、ガイダール氏らの論文の批判的分析を行ないたい。ガイダール氏らの論文は一面ではマルクシズムに対する批判であり、他面ではマルクシズムの中から新自由主義——「リベラル派マルクシズム」に都合良く利用できそうな部分を取り出そうとする試みである。マルクシズムを客観的に取り扱おうとするなら、第一にいわば「古典的マルクシズム」ないし「真正マルクシズム」とも言うべきマルクス・エンゲルスの理論的遺産の本当の内容を取り出し、第二にそれといわゆる「現実の社会主義」諸国で支配的イデオロギーとなっていたその俗流的理論とを区別することが必要であるが、ガイダール氏らの論文ではそのどれもがなされていない。だから新自由主義を基礎づけるために「リベラル派マルクシズム」を用いようという提案は控え目に言っても奇妙なことである。一体誰のためにまた何のためにそれが必要なのだろうか。

ガイダール氏らの論文は「マルクシズム：科学的理論と“世俗的宗教”のあいだ（リベラル派の弁明）」と題されているが、これはもちろんマルクシズムの「弁明」ではなくてマルクシズムに対する「リベラル派の批判」である。マルクシズムを宗教と対比するのは新しいことではない。「現実の社会主義」の実態がそのもととなった。しかしそれはマルクス・エンゲルスとは関係ない。ガイダール氏らはこの対比を基礎づけようとしてマルクシズムは全一の世界観であり、実践活動への指針であるなどという点を指摘するが、これはどの哲学でも持っている客観的な目的なのである。なおマルクスが好きなモットーはと訊かれて「すべてを疑え」だと答えたのは有名である。

ガイダール氏らは1871年に W. ジェボンズの『経済学の理論』が発表され、それを讀んだマルクスは自己の労働価値論の誤りに気づき1872年以後主著『資本論』の仕事を止めたと書いている。しかしそんなことはない。MEGA の最近出版されたⅡ/14巻とⅡおよびⅣ部の該当の巻にはマルクス晩年の経済学草稿と生涯最後の10年間の多数の経済学著作からの膨大な書き抜きが発表されているのでそれを見ればそれはすぐ分かる。ところで1880年以前及びそれ以後にもマルクスがジェボンズの『経済学の理論』を讀んだという証拠はない。1878年から1880年までのマルクスのノートにはジェボンズの1875-1878年の3編の論文の名前が書き抜かれているが、1880年のノートで初めてジェボンズの『経済学の理論』が記録されている。(小檜山注。これは前後の文脈から書物の名前を書き付けておいたということだと思われる)。マルクスが何故『資本論』さらには6部からなる壮大な「経済学批判プラン」の構想を完成させなかったのか、また何故 W. ジェボンズ、C. メンガーその他の新しい潮流の代表者達の著作を「無視した」のか。それにはいろいろな原因が考えられる。例えば生涯最後の10年間の健康や労働能力の状態、研究の重点を特に資本主義的生産に先行する諸形態の研究の掘り下げや歴史学のヨーロッパ中心主義の克服に移したこと、価値論の完成等々である。しかし本当の原因の解明はそのための特別な研究を必要とする、それにはマルクスの書き抜き、覚え書き、本への書き込みなどの膨大な未調査の資料への沈潜を必要とするものである。

ガイダール氏らはマルクス・エンゲルスの歴史の唯物論的理解を、新自由主義の必要に合わせようとしてこの歴史観の基本的特徴のリストを作っている。けれどもその際彼らはこの歴史観の最も根本的な特徴である弁証法をリストに入れてさえいない。しかしこの歴史観は歴史の単なる経済的なまたは唯物論的な理解ではない、それは社会とその歴史の唯物弁証法的理解なのである。この史観は社会の総構造(生産力—生産関係その他の社会関係—政治的上部構造—社会意識の諸形態)の歴史的(非恒久的)性質を教えているのであり、また社会意識の役割の量的のみでなく質的な増大(この点は現代の科学技術、情報そしてバイオ技術革命の解明に極めて重要)等々多くのことを教えているのである。

ガイダール氏らはマルクスの学説の中に「ヘーゲルからとった“歴史の終わり”の承認」ということを挙げているが(本誌第54巻第6号 p.5 参照)、これは全くナンセンスである。ここで「マルクスの名で語ることができる」マルクスの理論の最も権威ある解説者エンゲルスの言うところを訊いてみよう。「認識と同じように歴史もまた人類のある完全な理想状態に到達して完結するということはない。完全な社会とか完全な“国家”とかいうのはただ想像のなかでしか存在できないものである。反対に次々に続いて現れてくる歴史の状態はすべて低いものから高いものへすすんでいく人類社会のかぎりない発展の道程における一時的段階にすぎない。」(『フォイエルバッハ論』、大月書店版邦訳マルクス・エンゲルス全集第21巻 p. 271)。「われわれには終極目的などありません。われわれは進化主義者です。われわれには人類に終極の掟を命令するつもりなどありません。」(『1893年5月8日の“ル・フィガロ”紙特派員とのインタビュー』同全集第22巻 p. 536)。さらにエンゲルスは真に「宇宙的」な楽観主義をもって次のように書いている。「さらに数百万年が過ぎ行き、数十万の世代が生まれかつ死ぬであろう。…そしてこのような太陽系がその生涯を終えてしまったとき、そのあとはどうなるのであろうか。…しかしわれわれは確信する、物質はどんなに変転しても永久に物質でありつづけ、その属性のどの一つも失われることはありえず、またそ

れゆえに物質は、それが地球上でその最高の精華、思考する精神をもまた絶滅させてしまうであろうその同じ鉄の必然性をもって、この思考する精神をいずれかの場所、いずれかの時にふたたび生み出すにちがいないことを。」（『自然の弁証法』、同全集第20巻 p.354-358）。「共産党宣言」の著者達は当時から各人のそして全ての人々と全社会の自由な発展を社会の改造の終極の成果であると考えていた。社会の無限の自由な発展がどうして「歴史の終わり」になるのだろうか。なおマルクシズムの創始者達の考えからすると「共産主義後」はどういうことになるのかを考えてみると、答えは一つ、社会の無限の発展ということになるだろうが、その各時代は所有形態ではなく他の基準によって区分されることになるだろう。生産手段からの生産者の疎外の克服、そのための社会の敵対的矛盾の克服——それは「歴史の終わり」ではなくて真の人類の歴史の前史の終わりなのである。

マルクシズムをアメリカ式のグローバリゼーションの正当化に利用しようとする点については議論する必要があるがここでは時間がない。その他にもマルクスの理論の奇妙な解釈が沢山あるが、それらは意図しているか否かに関わらずマルクスの理論を歪曲しているものなのである。

ガイダール氏らは「リベラル派マルクシズム」が新自由主義を強化するという証拠を何一つ示していない。マルクスの理論は論理的に極めて一貫したものであるから、そこから新自由主義的な結果を取り出すのは難しい。新自由主義というのは少なくとも語義のうえからは自由の実現を意味する。マルクシズムもまた自由の実現の客観的、歴史的必然性を明らかにしている。けれども今もしここで二人の人が同じことを言ってもそれは同じ内容を言っているのではない。私の理解が正しければ、新自由主義の言う自由とは先ずは企業活動の自由、他人の労働の収奪の自由、あらゆる手段を用いての利潤の獲得の自由、社会的生産手段の私的所有の自由であり、その次に「個人の自由」、「人権」等々がくるのである。これに対してマルクシズムの言う自由とは「全ての人の自由な発展の条件としての各人の自由な発展」のことであり、そのためにはあらゆる形の疎外まず生産手段からの生産者の疎外を克服するための長い困難な歴史的プロセスが必要だとするのである。なんと大きな違いだろうか。（小檜山注。ここでバガトゥリヤ氏が言っているのは全くその通りではあるが、しかし今日新自由主義が何故生まれどういう役割を果たしているのか、つまりそれと今日の政治経済の現実との関わりを具体的に分析して解明してみせないと、マルクシズムが昔から言っていることの繰り返し、抽象的宣伝になってしまう。いわゆるマルクス学者の限界を示すことになってしまうだろう。もっともこの後で氏はマルクシズムの批判的展開の必要性を主張しているのではあるが。）

どのような科学的理論とも同じようにマルクシズムにも内的諸矛盾、検討すべき誤った諸命題が存在している。私はマルクシズムの基礎の一つである労働価値論は一面的であり、ちょうどニュートンの古典力学がアインシュタイン、ボーアなどの相対性理論と量子力学へ移行したようにもっと拡大深化させるべきだと考えている（小檜山注。この意見には全く賛成である。）ともかくマルクスの理論は人類知の偉大な成果であり、この遺産の貴重な内容を俗流化からまもり、新しい歴史的条件のもとでこの世界のあらゆる変化と現代科学のあらゆる知的発見の成果を考慮に入れながらそれを発展させなければならない。発展こそがマルクシズムの存在のしかた、そのありかたなのである。マルクシズムの俗流化はその俗流的批判をもまた生み出す。古典を歴史的・批判的に扱うことは客観的な必要性がありかつ理論そのものの方法論的要請でもある。これに関してエンゲルスの最後の著作『資本論第3巻への補遺』の中での W. ゾンバルトの論文についての発

言を引用することは有意義だろう。エンゲルスは言っている。「ドイツの大学教授がマルクスの叙述のなかにマルクスが実際に言ったことを全体として見ることに成功しているということ、またその大学教授がマルクスの体系の批判はそれを反論することではありえず——“そんなことは政治的野心家にやらせておけばよい”——、たださらにそれを発展させることでのみありうる、と声明しているということはこれが初めてである。」(大月書店版邦訳マルクス・エンゲルス全集第25巻 p. 1141)。

A. チェプレニコ (経済学博士, 国立経済大学教授)

私の師 B. シュクレードフが書いているように、いわゆる正統派マルクスイズムは歴史主義の原則を取り入れたことがない。(小檜山注。シュクレードフ氏は私にとってもモスクワ大学時代の忘れ難い師である。彼の著書の一つは邦訳されている。岡稔・西村可明訳『社会主義的所有の基本問題』, 御茶ノ水書房, 1973年。なお氏はソ連邦崩壊以後は沈黙を守っていると伝えられている)。しかしマルクスはその著作を彼と同時代及び先行する時代の経済学に対する批判として、また彼の時代のブルジョア的生産方法の分析というプリズムを通してのその批判として考えていた。

マルクスと現代の経済学とは接点がない、というのは現代経済学は全く別の問題を取り扱っているからだ。それは経済状況が変わってしまったからだし、また現代のどの経済学もマルクスが取り組んだ次の三つの問題を取り扱ってはいないからだ。その第一は貨幣形態の発生の問題、貨幣とは何かという問題だが、マルクス以後の経済学は貨幣制度の機能の叙述に終わっている。第二は資本の前提条件および結果としての私的所有の問題で、これはマルクスが見事に解決したものである。第三は地代の発生の問題で、マルクスはともかくその価値論と矛盾しない解決の方向を示唆した。なおこれとは別だがマルクスは価値の生産価格への転化といういわゆる転形問題は解決せずに残した。

なおこの討論会の出席者を見渡すと35-40歳よりも若い人は一人もいない。これは嬉しいことだ。ガイダール氏らや私自身も含めて、我々は自身どう思おうとレーニン・スターリンの「後継者達」に教え込まれたいろいろなことから脱却してマルクスに対することはやはりできないのである。私はこのようなことのない新しい世代が偏見のないマルクス理論の再建を果たすことを期待するものである。

[未完]